

2013年10月16日(水)

医療福祉ジャーナリズム特論 大熊由紀子教授

「再発患者と少年院出院者と～当事者が語ることの意味」

Web 受講 浅野泰世

先生がご自分のこれまで歩いてこられた道を、借りてきた言葉ではなくご自分自身の言葉でお話くださったことに、深い感銘を受けました。そして、聞き終わった時に元気を頂き、明るい気持ちにさせて頂きました。

人は生まれ育った環境や、そこで結んだ人との関係、置かれた状況によって様々な姿を見せるが、どのような人でもその内面に、弱さ、愚かさ、悪意など、否定的な側面を持つ一方で、人を信じる強さや、他者を思いやる優しさ、正しいことを行いたいと願う善良さを併せ持つ存在なのだということを改めて思い起こさせて頂きました。そして、否定的な側面と闘い、それを克服しようとするところに、人としての輝きがあるのだと教えて頂きました。

先生のお話を伺っていて、乳がん体験者の市民団体アイデアフォーの「再発おしゃべりサロン」に立ち会った時のことを思い出しました。

アイデアフォーには「おしゃべりサロン」という“患者が語る場の提供”を行う活動があります。これは、乳がん患者と家族一般に開放されたものですが、「再発おしゃべりサロン」の参加は再発患者に限られます。

これを立ち上げるに際して、世話人の中に反対する意見もあったそうです。その理由は、再発患者が集まったら、「涙、涙」になってしまうと恐れたからだといいます。しかし、蓋を開けてみると、そのような心配は全くの杞憂であることがわかったのです。実際、私が何度か立ち会った中で、参加者が涙ぐむのを目にしたのは1度だけでした。ユーモアのセンスに富む方々が沢山参加するサロンでは、むしろ笑顔が絶えませんでした。

病いや治療の副作用による不快な症状に対して、弱音を吐くのではなく自分なりの克服法が述べられました。悲しみや不安をそのまま持ち込むのではなく、そのような気持ち抱きつつも前向きに暮らせることが語られました。診療の現場で体験した不快な出来事や、医療制度の不備が話題に上るときには、個人的な愚痴や恨みとして話すのではなく、再発した仲間の思いを代弁してより良い医療や制度を求めるものでした。

サロンで見せる参加者の姿は、もちろん、彼女たちの一面であり、私の知らないところで多くの涙を流していると思っていました。しかしサロンには、泣くためにではなく、笑顔で仲間を元気づけるために訪れてくれたのです。そして、仲間に元気を与えることにより、自らも元気をもらって帰る、それが「再発おしゃべりサロン」でした。

私はそこで、何人かの心より尊敬できる方と出会い、自らの生き方を省みる程の大きな影響を受けました。彼女たちは、もともと素晴らしい方だったに違いありませんが、命に限りのあることを見据えて生きることにより、より強く、より聡明に、そしてより誇り高く自分自身を成長させたのだと感じました。人間はいかなる状態にあっても、自らを輝かせ、関わった人間の生き方さえを良い方向に変える可能性をもつ存在であることを、彼女たちは教えてくれました。私は、「人間の尊厳」という言葉もつ意味を、何よりも彼女たちに教えられたと思っています。

再発患者と少年院出院者の交流の場は、全く異なったもののようには思われますが、その参加者には共通するものがあるように感じました。

辛い体験は同じ体験を分かち者にしか理解されないと感じ、孤独に陥りやすいこと。

隣人や関係者に対する罪の意識を抱き、素直に気持ちを表現することを躊躇ってしまうこと。

自分は役に立たない人間であるという気持ちを抱きやすく、また、周囲からそのよう見做されてしまうことがあること。

しかし、それゆえに、仲間を支えていると感じることによって、困難を乗り越える力を得られること。自分の困難な体験を客観的に眺め、整理し、そこに意味を見出して語る、（津富先生からいただいた資料の言葉を借りれば）「物語」を持っていること。

そして、人間が困難を克服して自らの価値を再び見出すその「物語」は、語り手自身に力を与えると同時に、聴く者の心に「人間の尊厳」の重さを深く刻むことです。

先生たちの活動は、いずれ社会を変える可能性を秘めたものであると感じました。

変わった先には、ハンディ、困難、過ちという、生きる上での重い荷を負った人を仲間として受け入れ、共に助け合い、互いに尊敬しあえる社会があるのだと思います。

貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。